

# 『狭衣物語』 飛鳥井の姫君と〈忍ぶ草〉について

塩見 香奈

## はじめに

『狭衣物語』の作中では、飛鳥井の女君の遺児である飛鳥井の姫君を示す語として〈忍ぶ草〉が度々用いられている。『新編日本古典文学全集』における用例を確認したところ、平安時代の物語作品における〈忍ぶ草〉の用例数——『うつほ物語』のみ、類似語と考えられる〈忍ぶの草〉という語の用例が確認できた為、その用例も数に入れて表記した——は、【表1】から分かる通り非常に少ない。

【表1】 平安時代の物語作品における〈忍ぶ草〉の用例

作品名	用例数
伊勢	1
大和	1
うつほ	2
源氏	3
浜松 中納言	1
夜の 寝覚	1
狭衣	8 (流布 本9)

その中でも『狭衣物語』の八例、異本である『日本古典全書』等の流布本系統の描写を含めると九例（次頁【表2】）というのが最大の用例数であるが、その全てが飛鳥井の姫君を示す語として用いられているという点に注目したい。

飛鳥井の姫君における〈忍ぶ草〉は、『大系』『新全集』『古典全書』『集成』といった現代注では「女君を偲ぶ、思いおこすよすがとなる遺児」「飛鳥井女君の忘れ形見」と解釈され、『全註釈』では上記の意に加えて「狭衣が遺児の父親であることを秘す意」とされている。また古註釈の『下紐』では「ねちけたる母かたなりとも」と、飛鳥井の女君が狭衣の子の生母として相應しい身分ではないことが指摘されており、『狭衣聞書』では「御子の事を忍草といへり」とされている<sup>2)</sup>。

また先行研究では、伊藤博氏によって「飛鳥井女君の忘れ形見の遺児」、野村倫子氏によって「故飛鳥井を偲ぶこと」と論じられており、スエナガエウニセ氏は〈忍ぶ草〉を「飛鳥井の女君の忘れ形見」とした上で「慰め」という語を挙げ、狭衣が「一品の宮との結婚の慰め」を姫君に見出ししていると指摘している<sup>3)</sup>。

本稿は、「狭衣が遺児の父親であることを秘す意」を挙げている『全註釈』の説を検証し、支持した上でさらに掘り下げて、狭衣自身が意図的に「姫君との血縁関係を隠す」「人目を忍ぶ」意を込めている、という私の解釈について論じていきたい。

【表2】『狭衣物語』における〈忍ぶ草〉の用例

	巻	視点	喩えられる人物
①	巻二 (流布本)	狭衣	飛鳥井の姫君
②	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
③	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
④	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
⑤	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
⑥	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
⑦	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
⑧	巻三	狭衣	飛鳥井の姫君
⑨	巻四	堀川の上	飛鳥井の姫君

一、物語における〈忍ぶ草〉の用例

まずは、【表1】に挙げた平安時代の物語作品における〈忍ぶ草〉の用例のうち、『狭衣物語』以外の九例を確認していきたい。

A 『伊勢物語』一〇〇段・「忘れ草」

むかし、男、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」とて、いだしせたまへりければ、たまはりて、

忘れ草おふる野辺とは見るらめどこはしのぶなりのちも  
頼まむ  
【新全集】二〇〇～二〇一頁

B 『大和物語』一六二段・「忍ぶ草」

また、在中将、内にさぶらふに、御息所の御方より、忘れ草をなむ、「これはなにかいふ」とてたまへりければ、中将、忘れ草生ふる野べとはみるらめどこはしのぶなりのちも  
頼まむ

となむありける。おなじ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それによりなむ、よみたりける。

【新全集】三九八～三九九頁

C 『うつほ物語』嵯峨の院巻

霜のいと白き朝に、平中納言殿より、「思うたまへ懲りぬべき御気色は、いとよく見たまへ知りながらなむ、

一人のみ夜な夜な霜の寒きには忍ぶの草も生ひずやあるらむ

かく聞こえさすこそ、いとおほろげなれ。こたみおぼつかなく」と聞こえたまへど、御返りなし。

【新全集】①・三三二頁

D 『うつほ物語』楼の上 上巻

ありつる物御懷より引き出でて見せたてまつりたまへば、いとあはれに覺えたまひて、傍らに、

故郷はいづくともなく忍ぶ草しげき涙の露ぞこぼるる

とてさし出でたまへれば、見たまひしも、げにいかにも、とあはれに覚えたたまへば、「御筆の下ろし」とて、

〔『新全集』③・四五三頁〕

E 『源氏物語』夕顔巻

そのわたり近きながしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。

〔『新全集』夕顔①・二五九頁〕

F 『源氏物語』蓬生巻

あたりあたり見ゆるに、昔に変わらぬ御しつらひのさまなど、忍ぶ草にやつれたる上の見るめよりはみやびかに見ゆるを、昔物語に、たふこぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。

〔『新全集』蓬生②・三三二頁〕

G 『源氏物語』宿木巻

宮の忍びてものなどのたまひけん人の忍ぶ草摘みおきたりけるなるべしと見知りぬ。似たりとのたまふゆかりに耳とまりて、

〔『新全集』宿木⑤・四五二頁〕

H 『浜松中納言物語』巻第二

また、人はかくさまざまおぼし乱れけるに、われはほかの世に立ち離れ、かかる忍ぶ草も摘み出でけるよ、と、たれも見おぼさむこと、のち隠れなかるべけれど、ふとなほいとほしうおぼして、

〔『新全集』・二二九頁〕

I 『夜の寝覚』巻二

昔の世さへ恨めしくとあるを、見ぬやうに紛らはしたまへど、忍ぶ草の露も、同じくほどけてかかりたまへど、御返りまではおほしもかけず、贈りたまへる物の、こまやかに殊なるを、日暮らして対の君に見す。

〔『新全集』・二六六頁〕

Aの『伊勢物語』とBの『大和物語』はほぼ同一の内容となつており、恋惚ぶ意の〈忍ぶ草〉と愛情が薄れた意の〈忘れ草〉を用いた歌のやりとりが行われている。Cの『うつほ物語』嵯峨の院巻では恋心を耐え忍ぶ意、Dの楼の上上巻では故郷を思ふ意で用いられている。E・Fの『源氏物語』夕顔巻と蓬生巻では、それぞれ草が生い茂るといふ状況説明に用いられており、Eは光源氏と夕顔が訪れた薄暗い廃院、Fは荒廃した末摘花邸について語られている。

G『源氏物語』宿木巻では、薫が中の君から浮舟の話聞き、八宮と秘かに契つた女性との間に成された子である浮舟に対して、H『浜松中納言物語』では、中納言が自身と唐后の子である若宮に対して、そしてI『夜の寝覚』では、中の君が自身と大納言の子である石山の姫君に対して、それぞれ〈忍ぶ草〉の呼称を用いている。

ある人の血を引く子に対して〈忍ぶ草〉の呼称が用いられる前例はこのG・H・Iの三例であるが、その用例数は浮舟、若宮、石山の姫君に対してそれぞれ一例のみとなっており、飛鳥井の姫君のように〈忍ぶ草〉という呼称が八、九度にもわたり用いられているのは特異である。こうした飛鳥井の姫君と〈忍ぶ草〉とい

う語の繋がりについて、更に掘り下げて検証していきたい。

二〇〇九年

## 二、飛鳥井の姫君と〈忍ぶ草〉

次に、先の【表2】に挙げた飛鳥井の姫君に用いられている〈忍ぶ草〉について、改めて確認していきたい。

(巻二④・二一〇五頁)

### ① 流布本系統『日本古典全書』(『狭衣物語』上)

いかなる様にも在りと聞かましかば、忍ぶ草一人をば、物ねちけたりとも如何はせむ、尋ね取るやうもありなましを、ひたすらさしも思ひなりけむよ。(巻二・三三三頁)

この①の描写に関しては『日本古典全書』『新潮古典集成』等の流布本(古活字本)系統のみに見られるものとなっており、深川本系統と大島本(九条家旧蔵本)系統においては、〈形見〉という言葉が用いられている。

深川本系統と大島本系統の本文にはほぼ異同がなく、流布本系統の本文のみ異同が見られる場面となっており、飛鳥井の姫君を示す語が流布本系統は〈忍ぶ草〉、深川本と大島本系統は〈形見〉となっていることがわかる。

この場面においては呼称の違いだけでなく語る人物にも違いが生じており、流布本は狭衣視点故に、狭衣が飛鳥井の姫君の呼称として用いている〈忍ぶ草〉が早くから使われ、深川本と大島本は、飛鳥井の女君視点故に、もう二度と逢えないであろう狭衣との恋の証、忘れ形見として〈形見〉という呼称が使われたと考えられるであろうか。

### ・深川本系統『新全集』

我も我が身ひとつにもあらず、形見をだにも残さず、ただこの人に残りなく見馴らされじと思ひ惑ひてうち入りにけんも、心のほどはげにはかばかしからざりけるにこそは、と思ひつづくるも疎ましよう心ふかかりけるかなとはおほえず、

(巻二①・二一〇六頁)

② 巻三、飛鳥井の女君の法要の後、忘れ形見である姫君の行方を案ずる狭衣の様子。

・大島本系統『全註釈』(『狭衣物語全註釈』IV、豊島秀範・太田美和子・南昇・石渡健児・竹内佑希・神田久義校注、おうふう、

我が身一人にのみもあらず、形見をだに残さず、ただこの人に残りなく聞かれじと思ひ惑ひて、落ち入りにけん心のほどは、げに、はかばかしからざりけんこそは」と思ひ続けるに、うとましよう心ふかかりけるかなとはおほえず、

さはあるし暁その夕べにや消え果てにけんと思せば、誰ともなけれど、そのほどより、むつまじう思す僧どもに言ひつけたまひて、またまたの日までの巾ひをとぞ、いみじう忍びてしたまひける。いかなるにても、この忍ぶ草のありなしを聞くわざもがなと、御心に離るる折もなし。

『新全集』②・二二一～二二三頁

深川本系統と大島本系統においては、初めて飛鳥井の姫君に対して「忍ぶ草」が用いられた場面となっており、『新全集』では参考歌として「いかにせむ忍ぶの草も摘みわびぬ形見（簀）と見えし子（籠）だになければ」（『拾遺集』・哀傷・二二一〇・読み人しらず）が挙げられている。

③ 卷三、常磐の里に向かう際、忘れ形見である姫君の境遇を案じる狭衣の様子。

世にあり聞かとも、今はその人をとかく思ひ尋ねんは、いとねじげがましきを、ひたすらに亡くなりけんは、心安くめやすきに、ただかの忍ぶ草の、露のかごとにて、世に出でさすらはんが、心憂ければ、いと御心も静まらず、

（『新全集』②・五三三頁）

この場面では狭衣の、女君の忘れ形見である我が子に会いたいという気持ちと、身分差のある女性との間に子供をなし、その子供が頼りない境遇で生活していることへの憂いが描かれている。

このように狭衣が世間体を気にして憂っているのは、同時期に起きていた今姫君の入内騒動が関係しているのではないだろうか。洞院の上は今姫君の後見を依頼され、今姫君と母代の滑稽な様子を見た狭衣は、次のように語っている。

かごとばかりにても、このわたりよりとて御覽ぜられたまへ

らんよ。げに一つは思しめすべきにもあらねど、大臣などの身にて出だし立てたらんよと思しめされたまはん、いと名立たしう憂きことにこそあらめなど、（『新全集』②・四六頁）

狭衣はこのような姫君を入内させれば大臣家の家名に傷が付くと感じ、入内を阻止しようと決意する。そして、自分の低い女性との間に成した子どもを引き取った末に起きる騒動の恐ろしさを身をもって知ったところに、狭衣自身にも娘がいたことが発覚するのである。その姫君が今姫君と同じように家名を脅かす存在になりうるという不安を感じているが故に、自身との血縁関係を隠そうとしたのではないか。

④ 卷三、飛鳥井の姫君を一品の宮が引き取ったという事実を知った後、一品の宮が姫君を宮中に帯同しているのではと考え藤壺周辺を徘徊する狭衣の様子。

大将殿は、かかる内裏住みにも、この忍ぶ草は具したてまつりてやとゆかしければ、人知れず、さるべき折々は、このわたりをたたずみつつ、けしきを見たまひけり。

（『新全集』②・七五頁）

狭衣は我が子に会いたいという強い思いから一品の宮に近づくこととなり、そうした行動が意に沿わぬ婚姻を結ぶ切っ掛けとなってしまう。

⑤ 卷三、自身の軽率な行動が一品の宮降嫁に繋がってしまった

という後悔から、姫君への関心を薄れさせていく狭衣の様子。心にかかりて、あはれに思されし忍ぶ草も、つゆ知らまほしからず悔しうなりたまひて、そのわたりかき絶え、あながちなりし夜な夜なの立ち聞きも、例の御癖なれば、悔しうわりなし。

〔『新全集』②・九〇～九二頁〕

この時点で飛鳥井の姫君への関心が薄れている狭衣は、再び嵯峨野院女二の宮とその子供である若宮へと目を向けている。狭衣が女二の宮に歌を送った際の描写では、若宮の呼称として〈大和撫子〉という語が二度用いられている。

前裁ども、雨に心地よげに思ひたる中に、大和撫子のいたう濡れて傾きたるを折らせたまひて、嵯峨野院へ参らせたまふ。

恋ひわびて雨に濡るるふるさとの草葉にまじる大和撫子  
〔『新全集』②・九二頁〕

若宮を〈大和撫子〉に喩えて、女二の宮に対し我が子のことを愛しく思わないのですかと問いかけるような歌となっている。作中で子供に対し〈撫子〉が用いられているのは若宮のみとなっており、度々〈忍ぶ草〉と喩えられている飛鳥井の姫君に対しては〈撫子〉という語は見られない。同じ狭衣の子供であり、愛しい女性との縁を感じられる存在として描かれてはいても、若宮には〈撫子〉姫君には〈忍ぶ草〉と、美しい花と草という、母親の身分差を反映させたかのような、明確な呼称の違いがあることがうかがえる。

⑥ 卷三、一品の宮との不仲により、飛鳥井の姫君に会う事もできない状況を嘆く狭衣の様子。

いでや、かねては、されどいかかはせん、忍ぶ草を近くて見んを取り所に思ひしかども、その慰めもまだ見たまはざりけるにや、かなはぬ世の中、まめやかに思さる。

〔『新全集』②・一一二頁〕

『新全集』において「源氏の宮や女二の宮に身分的に劣る、母親の飛鳥井の女君は「尾花の思ひ草」「道芝の露」など物語全体を通して草のイメージで表現されている」と指摘されているように、飛鳥井の姫君も〈草〉に喩えられる母と同様に〈忍ぶ草〉＝〈草〉のイメージで表現されている。狭衣視点で「女郎花」などの美しい〈花〉のイメージで語られる母・女二の宮や、「撫子」＝愛らしい〈花〉のイメージで表現される若宮とは異なる位置付けがなされていると考えられる。

⑦ 卷三・飛鳥井の姫君と対面を果たした際の狭衣の心情。

姫君をかき抱きて、こなたに入れたまひぬ。

忍ぶ草見るに心は慰まで忘れがたみに漏る涙かな  
押し当てて、いみじう泣きたまふを、あやしう恥づかしと思ひたるものから、  
〔『新全集』②・一一〇頁〕

『新全集』において、この歌の上句は「女郎花見るに心は慰までい」と昔の秋を恋しき」〔『伊勢集』七九、『古今六帖』第五・

むかしをこふ・二九〇八では作者表記なし)を本歌取りに踏まえたものとされている。

『新全集』②・三五八頁)

うれしく、いかでかは思しめされざらむ。

⑧ 卷三、出家を決意した狭衣が、今後の飛鳥井の姫君の境遇を案じる様子。

若宮の日を経て惑はしたまふぞ、いといみじき絆に思されけれど、殿も母上も、我に思し劣されたるもななめれば、うしろやすきに、さすがなる忍ぶ草ぞなかなか訪ひ寄りたまひて、宮にも彼を憎しとはあらねど、こよなう思し放ちたまへるさまに見えたまへば、いとど跡絶えなん後は、いかなるさまにてかと心苦しきを、思し余りて、

〔新全集〕②・一九一頁)

狭衣の両親から愛情を注がれている若宮に対し、飛鳥井の姫君は、狭衣との血縁関係を感じ取った一品の宮から距離を置かれていくようだと案じた狭衣が、姫君の庇護を請う為に母・堀川の上に実子であることを打ち明ける場面となっている。兄妹間での後ろ盾の差が描かれており、若宮に対しては「若宮」と語られているのに対し、姫君は〈忍ぶ草〉と表現されている。

⑨ 卷四、式部卿宮の姫君の懐妊が明らかになった場面。

宮の女御の御心地は、ただならぬさまのと、人見たてまつりなして、大宮にも啓しければ、かの忍ぶ草の御ことわりをこそ、さばかりも聞かせたまへ、若宮の御ことなどはまだ知らせたまはぬに、かう目に近くあざやかなる御ことを、珍しく

⑨は、九つの用例のうち唯一狭衣以外の視点、堀川の上の視点で描写される特殊な例であり、〈忍ぶ草〉が示す意味も、「飛鳥井の姫君の忘れ形見」としてよりも「狭衣の子供」としての意味合いが強くなっていることがうかがえる。

飛鳥井の姫君に対して〈忍ぶ草〉が用いられるのはこれが最後となっており、この後は養母である一品の宮の死と姫君の裳着を経て、養母と同じ「一品の宮」の呼称が用いられるようになる。

これら九つの用例を見た限りでは、〈忍ぶ草〉は主に狭衣の視点から、飛鳥井の姫君が飛鳥井の女君の忘れ形見であることが強調される為に用いられており、一部例外として、堀川の上の視点から飛鳥井の姫君と狭衣の親子関係が示されているように思われる。

しかし狭衣は、飛鳥井の姫君を飛鳥井の女君の忘れ形見として、自分の娘として愛しむことはあっても、すぐに自身との親子関係を公にしようとは考えておらず、母・堀川の上へのみ密かに打ち明けたのは出家を決意した⑧の際、姫君の身分が世に知られるようになったのは物語終盤の卷四後半、姫君の裳着が行われ「一品の宮」と称されるようになってからの事である。

〈忍ぶ草〉＝「飛鳥井の女君の忘れ形見」として狭衣から意識されている間は狭衣との親子関係が秘匿されており、その親子関係に気が付いた一品の宮に対しても狭衣は真実を語ろうとはしな

い。

### 三、和歌集における〈忍ぶ草〉の意味

『狭衣物語』における子どもや女君たちの呼称は、作中の歌語から用いられているため、和歌集における〈忍ぶ草〉の意味について確認しておきたい。

〈忍ぶ〉という語には、以下の三つの意味がある。

- ① 慕う（昔を偲ぶ、人を思慕する）
- ② 隠す（人目を忍ぶ、思いを秘める）
- ③ 耐える（我慢する）

では、〈忍ぶ草〉という歌語はどのような意味で用いられてきたのだろうか。

『歌ことば歌枕大辞典』に拠れば、平安時代中期までは主に①の「慕う」の意で用いられており、②の「隠す」の意味の用例はまれで、平安時代末期になってやっと「わが恋も今は色にや出でなまし軒のしのぶも紅葉しにけり」（新古今集・恋一・一〇二七・有仁）、「深き夜の窓打つ雨に音せぬはうき世をのきのしのぶなりけり」（同・釈教・一九四九・寂蓮）などと見られるようになることが指摘されている。<sup>4</sup>

また、『歌枕歌ことば辞典』では、平安時代中期までは①の「慕う」のケースが圧倒的に多く、②「隠す」や③「耐える」のケースは見出し難いとしている。②や③のケースが最初に表れるのは『千載集』「水隠りに言はで古屋の忍草しのぶとだにもしらせてしかな」（六五五・基俊）の歌で、千載、新古今の頃になると区

別もなくなり、①「慕う」、②「隠す」、③「耐える」の三つの意が同時に用いられるようになる<sup>(5)</sup>とされている。

もし仮にこれらの辞典類に従うならば、『狭衣物語』が書かれた時代における〈忍ぶ草〉は、①「慕う」という意味で用いられる言葉であって他の意味を有することは稀であるという事になり、飛鳥井の姫君の〈忍ぶ草〉においても、過去（飛鳥井の女君）を思慕する思いが込められるのみで、他の意図は有さないという事になるのだろうか。

しかし、はたしてそうだろうか。『新編国歌大観』において、『狭衣物語』成立前後の歌集の用例を調査したところ、【表3】に挙げるように、②「隠す」や③「耐える」の意味で〈忍ぶ草〉が用いられていると考える用例が複数確認できたのである。



歌集	歌番号	歌	詠者
一条摂政集	122	こひしきを人にはいはでしのぶぐさ しのぶにあまる色を見よかし	一条摂政
一条摂政集	123	いはで思ふほどにあまらばしのぶぐさ いとゞひさしの露やしげらむ	女
一条摂政集	147	冬さむみねさへかれにししのぶ草 もゆる春べは我のみぞ知る	一条摂政
一条摂政集	148	もえいでむ春をまつとてしのぶ草 ゆきの下にもねやはかれする	女
朝光集	104	しのぶぐさいかなるつゆかおきつらん けさはねもみなあらはれにけり	藤原朝光
兼澄集	133	恋ひつつもふる屋のしたの忍ぶ草 忍ぶるほどにおとなふやたれ	源兼澄
馬内侍	42	知りそめしことやくやしき忍ぶ草 知る人もなし絶えやしなまし	男
馬内侍	64	しのぶ草忍ぶやづまといひながら 夜深く露のおける袖かな	男
馬内侍	65	物思ふに秋は深くぞなりにける 軒のしのぶの色かはるまで	馬内侍
赤染衛門集	510	忍ぶ草しのびしをりも有りにしを あかぬは人のこころなりけり	男
赤染衛門集	511	今更になにかはつゆのもりつらん 忍ぶの草のさてもやみなで	赤染衛門
俊忠歌合	25	みごもりにはいでふるやのしのぶぐさ しのぶとだにもしらせてしかな	藤原基俊
江帥集	395	しのべとやのきのかやまのしのぶぐさ こひは人めをしのぶものかは	大江匡房
久安百首	674	あづまやのをがやの軒の忍ぶ草 しのびもあへずしげる恋路に	尾張守親隆朝臣
久安百首	1175	心にもあらで軒端の忍ぶ草 しのぶ思ひはつゆもかはらず	上西門院兵衛
頭輔集	63	あづまののきのかやまのしのぶぐさ こひをば人のしのぶものかは	藤原頭輔
袋草紙	851	恋しともいはでふる屋の忍草 しげさまさればいまぞほにいつる	藤原清輔
続詞花集	479	しらせばやしげき人めをしのぶ草 下葉にむすぶ露ばかりだに	隆恵法師
実家集	250	人知れずわれはこころにしのぶぐさ われをばきみがわすれぐさとや	藤原実家
千載集	655	水隠りにいはで古屋の忍草 しのぶとだにもしらせてしかな	藤原基俊
千載集	856	東屋のお萱の軒のしのぶ草 しのびもあへず茂る思ひに	前参議親隆
民部卿家歌合	206	我が恋はいはでふるやの忍草 としに添へても茂りぬるかな	定経朝臣
三百六十番歌合	653	わがこひはむぐらのなかのしのぶぐさ しのぶとだにも人はしらじな	有家朝臣

紙幅の都合上、【表3】に挙げた用例を全て論じるわけにはいかないのですが、そのうちの一部の用例を取り上げて論じることとする。複数の意を有する和歌の用例として、『一条撰政御集』『馬内侍集』『赤染衛門集』の歌を確認していきたい。

・『一条撰政御集』

(『新日本古典文学大系28』、犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注、

岩波書店、一九九四年)

しのぶぐさの紅葉したるを笛にいれたまへる

122 こひしきを人にはいはでしのぶぐさしのぶにあまる色  
を見よかし

返し

123 いはで思ふほどにあまらばしのぶぐさいとひさしの  
露やしげらむ

いとほどへてしのぶ草の枯れたるにさして、おとよ

147 冬さむみねさへかれにししのぶ草もゆる春べは我のみ  
ぞしる

返し

148 もえいでむ春をまつとてしのぶ草ゆきの下にもねやは  
かれする

〈訳〉

122 しのぶぐさを口には出さず、しつと心に秘めて思っていますか、

このしのぶ草をさえ紅葉させてしまうほどに、あふれてしまった私の恋心を察して下さい。

123 言わずに私への恋心があふれてしまったと言うならば、長い間、涙の露で脛の忍ぶ草はいよいよ茂ったでしょうに。紅葉しているのは、あなたが心変わりしてしまっただけでしょう。

147 冬の寒さで根まで枯れてしまったしのぶ草も、また芽吹く春べとなることは、私だけが知っているよ。

148 萌え出でる春を待とうと堪え忍んでいる忍ぶ草ならば、雪に埋もれても根は枯れないでしょうに、冬の間中、訪れないとはあんまりです。

一二二番歌では「こひしきを人には言はで」「しのぶにあまる」、一二三番歌では「言はで思ふほどにあまらば」と、隠していた思いが耐えきれずあふれてしまった様が詠まれていることから、「忍ぶ草」には、相手を思慕するという意と共に思いを隠す、耐えるの意も含まれていると考えられる。一四七番歌では、春を待ち冬を耐え忍んでいる様と「我のみぞ知る」という語から、「忍ぶ草」には耐える、人目を忍ぶ、相手への思慕の念を隠すといった意もこめられていることがうかがえる。返歌の一四八番歌も、一四七番歌を踏まえて、春を待ち雪の下で耐え忍んでいる忍ぶ草に、人目を忍ぶ意や相手への思慕が込められている。いずれの歌も、「忍ぶ草」という語に、「慕う」「隠す」「耐える」の三つの意が込められていることがうかがえる。

・『馬内侍集』

をとこのし文字八字詠む心いひにおこせたるが、例ならずやありけむ

42 知りそめしことやくやしき**忍ぶ草**知る人もなし絶えやしなまし

またあるをとこのし**のお草**につけて

64 **しのぶ草**忍ぶやつまといひながら夜深く露のおける袖かな

返し

65 物思ふに秋は深くぞなりにける軒の**しのぶの色**かはるまで

〈訳〉

42 あなたとの縁が深まりはじめたことが口惜しいことですよ。私たちの**忍ぶ**は知る人もなく、絶えてしまうのでしよう。

64 軒先の**しのぶ草**に夜深くに露が置いてるように、**秘か**にあなたを思いながら、まだ夜深いころに起きて涙で袖を濡らしていますよ。

65 物思いにふけているうちに、軒先の**しのぶ草**の色が変わってしまうほど、秋は深まっていますが、私の心の奥深くに秘めていた恋心も、隠しきれず外に表れるほどになってしまいました。

四二番歌は「忍ぶ草知る人もなし」から人目を忍ぶ間柄であること、この思慕の念に耐えることができず、誰にも知られることなく絶えるのでしようかという思いがこめられている。また六四番歌と六五番歌では、相手への思慕を隠しきれない、耐えきれない様と解釈できるため、これらの用例においても、〈忍ぶ草〉に「慕う」「隠す」「耐える」の三つの意が込められていることがうかがえる。

・『赤染衛門集』

〔『私家集全釈叢書1』、関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子校注、風間書房、一九八六年）

としごろ、思ひかけたりけれど、えいひ出ででありける人の、けしきみせてのちに、をとこ

510 **忍ぶ草**しのびしをりも有りにしをあかぬは人のこころなりけり

をんなにかはりて、返し

511 今更になにかはつゆのもりつらん**忍ぶ草**のさてもやみなで

〈訳〉

510 **忍ぶ草**のように、じつと耐え忍んだ時もあったのに、その思いをあらわしてみてもなお、満たされないと感じてしまふのが、人の恋心というものなのですな。

511今更、どうしてその思おもいを洩はらしたのでしょうかね。耐たえ忍しのんで、心の中に秘ひめたままにしてしまわないで。

『赤染衛門集』の贈答歌では、思慕を隠したままじっと耐えることが出来なかった様、そのまま耐え忍んで隠しきればよかったのにと、歌の応酬が行われている。これらの歌における〈忍ぶ草〉も、「慕う」「隠す」「耐える」の三つの意が込められていることがわかる。

### おわりに

以上のように、「歌ことば歌枕大辞典」や『歌枕歌ことば辞典』で指摘されている『新古今集』『千載集』以前の歌集——先述した『一条撰政御集』『馬内侍集』『赤染衛門集』などの歌集——にも、「隠す」「耐える」意の用例があることから、〈忍ぶ草〉の中に「慕う」「隠す」「耐える」といった意が込められている用例が、複数あることが確認できた。

このように和歌集の用例において、〈忍ぶ草〉に複数の意図がこめられているとするならば、『狭衣物語』の〈忍ぶ草〉においても、「飛鳥井の女君の忘れ形見」という過去を追慕する、女君を思ふ以外の意——「狭衣が姫君との血縁関係を隠す」といった意も含まれる可能性を、見出すことができるのではないか。

物語における〈忍ぶ草〉の用例としてあげた、G『源氏物語』宿木巻では、八の宮が秘かに契った女性との間に成した子である浮舟を、H『浜松中納言物語』では、中納言が唐后との間に成し

た子である若君を、I『夜の寝覚』では、中の君が大納言との間に成した子である石山の姫君を、身分差や密通といった障害がある故に、血縁関係を隠す必要がある、秘事の子として〈忍ぶ草〉ととらえていた事がわかる。

『狭衣物語』の場合も、狭衣が飛鳥井の姫君に対し、身分の低い女性との間に成された子であること、狭衣の娘でありながら頼りない境遇で暮らしているという体裁の悪さを憂いていたことから、明確な形では描かれていないものの、狭衣の中で、今姫君と同じく家名を傷付ける存在にならないよう、血縁関係や出自を隠したまま姫君を引き取りたい、手元に置き大臣家に相応しい姫君として養育したいという気持ちがあるからと考えると考えられる。

狭衣が飛鳥井の姫君との血縁関係を明かすことを躊躇し、出自を隠したまま姫君を手元に置きたいと考えている様は、姫君が一品の宮のもとに居ると常盤の尼君から告げられた場面において、「うち出でんも、人の惑ふなる道といひながら、なほいかにぞやおぼゆれば、遠山鳥にて止みぬべきにこそはと思し続けるに」(『新全集』②・六〇頁)と、狭衣が父親だと名乗ることを躊躇い当面は姫君を遠くから見守るしかないと考えたことや、「宮の辺に、あなかしこ、かくとな知らせたまひそ、ゆめゆめ。なほ構へて、見せたまへ」(『新全集』②・六一頁)と狭衣が尼君に対し、一品の宮周辺に狭衣との血縁関係を知らせずに姫君と会わせてほしいと手引きを依頼していることからもうかがえる。

狭衣の落胤として相応しい出自とは言えないものの、密通の結果として成された子どもである若宮ほどの障害はなく、一品の宮

の夫となつてからは手元における存在となつたにも関わらず、狭衣が飛鳥井の姫君との血縁関係を執拗に隠し続けたのは何故なのだろうか。今姫君の入内騒動から、身分の低い女性との間に子を成したという世間体の悪さを気にしているというだけではなく、女二の宮の存在も関わってくるのではないか。

一品の宮との逢瀬の噂から降嫁に至るまで、狭衣は源氏の宮と女二の宮を意識しており、一品の宮との後朝の文よりも先に女二の宮に文を出すなど、妻となつた一品の宮よりも女二の宮との交流を重視している。また、先述した⑤の場面のようには、一品の宮との関係が世間に広まると、飛鳥井母子への執着が薄れ、女二の宮と若宮へと関心が移っていくことから、狭衣にとつては飛鳥井母子よりも女二の宮と若宮への思い入れが強いことがうかがえる。

そのように思い入れの強い相手であり、高貴な身分である女二の宮に不義の子を産ませてしまったという罪悪感に加え、身分の低い女性との間にも子を成したという事実を女二の宮に知られたくない、今以上に拒絶される理由を増やしたくない、という思いから、狭衣は飛鳥井の姫君との血縁関係を隠そうとしたと考えられる。

狭衣が親子関係を打ち明けるのは、先述した⑨堀川の上視点の〈忍ぶ草〉の場面となっているが、この場面から次第に飛鳥井の姫君が「狭衣の子供」として意識されるようになり、身内のみならず世間の人々にも狭衣と姫君の血縁関係が周知されるようになると、飛鳥井の姫君に対し〈忍ぶ草〉の呼称は用いられなくなり、養母と同じ「一品の宮」の名で呼ばれるようになっていく。

狭衣の母である堀川の上としては、身分の低い飛鳥井の女君の娘という認識はあつても、子どもがいらないと思われていた状況下での告白で、愛息子の狭衣に娘がいたという驚きから、「狭衣の子」という印象の方が強く残つたと思われる。

また、この場面と関係する描写としては、姫君の宮中参内後に堀川の大内視点で「道芝の露の形見」〔新全集〕②・三七八頁〕と称される場面がみられるが、生母に似ているという容貌、その出自からは考えられないほどの上品な美しさが堀川の大内によつて賛美され、「今までかろがろしき御名ざしも、あるまじきことなるを」〔新全集〕②・三七八頁〕と、身分の低さを重視するが故に姫君を軽んじていたこと、飛鳥井の女君だけではなく、狭衣の高貴な美しさとも重ね合わせるができるような、上品な様子を目の当たりにし、狭衣帝の姫君に相応しい待遇を整えることを決意した様が描かれている。

さらにその後の場面において、一条院からは、「形見にも誰をかはと思しめして」〔新全集〕②・三七九頁〕とあるように、飛鳥井の女君の忘れ形見としてではなく、亡き一品の宮の忘れ形見・ゆかりとして丁重に扱われていくことになる。

そのようにして飛鳥井の姫君は、堀川の大内から狭衣帝に相應しい高貴な姫として、また一条院からは、亡き一品の宮の忘れ形見の姫として双方から丁重な扱いを受ける事となり、宮中の人々や世間の人々からも、高貴な姫君・一品の宮として認識されていくにつれて、姫君に用いられる呼称も〈一品の宮〉へと変わっていく。

